

学 位 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

1. 申請者氏名	後藤 大輔
2. 審査委員	主 査：（岡山大学 教授） 加賀 勝 副主査：（上越教育大学 教授） 周東 和好 委 員：（岡山大学 教授） 鈴木 久雄 委 員：（岡山大学 教授） 足立 稔 委 員：（岡山大学 教授） 酒向 治子
3. 論文題目	教員養成段階で身につけるべき器械運動の指導力獲得に有効な対面（集合）学習 とeラーニングを組み合わせた授業提案に関する研究
4. 審査結果の要旨	教科教育実践学専攻生活・健康系教育連合講座 後藤大輔 から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。 論文審査日時：令和 4年 2月17日（木） 11時20分～11時50分 場 所：岡山大学教育学部本館1階112室及びオンライン 1. 学位論文の構成と概要 (1) 学位論文の構成 第1章 緒論 第2章 学校教育現場における器械運動の指導に関する実態についての研究 第3章 教員志望学生における学校体育での器械運動の実技経験についての研究 第4章 小学校教員志望学生における器械運動の指導に対する自信の変化についての研究 第5章 教員養成段階における器械運動の指導力獲得に向けた授業提案 第6章 総括議論 (2) 学位論文の概要 器械運動は非日常的かつ複合的な動作が多く、学年進行に伴い技が発展していく特性を持つ。特に中学校以降は発展技が多く例示され、教員は指導の困難さを感じると考えられる。このような器械運動の運動特性や特性に起因する指導の難しさが教員の苦手意識につながり、学校教育現場における器械運動の授業を消極的な取り扱いにしていると考えられる。教員養成段階に関する胡ら（2011）の先行研究では、小学校教員を志望する学生について、全体の半数以上が器械運動に自信を持っておらず、教える自信も持っていなかったことが報告されている。また、小倉ら（2017）が中・高等学校の保健体育科教員を志望する学生に行った調査では、器械運動領域の自らの実技能力について苦手意識を持つ学生が多く、技の中には多くの学生が達成できる技とそうでない技があったと報告している。このように、教員養成段階においても器械運動に対して苦手意識を持つ者が多いことが明らかになっている。これらの学校教育現場と教員養成段階双方の課題を踏まえ、本研究では2つの研究課題を設定した。研究課題1は、学校教育現場における器械運動の指導に関する実態を調査により明らかにすることを目的とした。研究課題2は、教員養成段階における器械運動の学習方法等の改善が指導力獲得に及ぼす影響を明らかにするとともに、対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践を行い、養成段階における器械運動の指導力獲得に向けた授業提案を行うことを目的とした。 研究課題1は、岡山県S市内の小学校教員164名を対象に器械運動の指導に関する実態調査を行

い、若手教員、中堅教員、ベテラン教員の職歴区分に分けて分析した。その結果、マット運動では開脚前転において、ベテラン教員で適切な指導の知識がない割合が低く、とび前転、倒立前転、伸膝後転、側方倒立回転において、若手教員で適切な指導の知識がない割合が高かった。鉄棒運動では、逆上がり、膝かけ上がり、前方支持回転、後方支持回転、前回り下り、転向前下り、片足踏み越し下り、両膝掛け倒立下りにおいて、若手教員で適切な指導の知識がない割合が高く、前方片膝掛け回転、後方片膝掛け回転において、若手教員で適切な指導の知識をもとに教えることができる割合が低かった。跳び箱運動では、台上前転において、ベテラン教員で適切な指導の知識がない割合が低かった。以上から、特に若手教員において適切な指導知識がない技が多くみられることが示され、教員を対象とした器械運動の校内研修会の必要性和ともに、教員養成段階における器械運動の指導力獲得を目的とする授業が重要であると結論づけた。

研究課題2では、教員志望学生を対象とした器械運動の授業で協同学習・フィードバック学習および体操競技の運動特性を取り入れた授業実践を行い、器械運動の指導に対する自信の変化について検討し、学習方法や学修形式の改善が器械運動の指導力獲得に及ぼす影響について明らかにした。事前・事後アンケート調査をもとにした探索的因子分析の結果、「器械運動の運動技術と指導技術」因子 ($p<0.01$) と「器械運動の知識と自己・他者理解」因子 ($p<0.01$) の2回目の得点が1回目の得点より有意に高値を示した。このことから、指導が難しいとされる器械運動において、学習方法や学修形式の改善が指導に対する自信を高め、指導力獲得につながると結論づけた。次に、教員志望学生を対象とした器械運動の授業において、対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践を行い、対面（集合）学習のみの授業実践（非介入群）と比較することで、器械運動の指導力獲得に関する効果を検討した。その結果、対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践は、マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動の技能・知識および指導に対する事後意識にて、すべての項目で介入群が非介入群よりも高い傾向であった。また、跳び箱運動では「指導に関する知識」($p<0.01$) と「指導内容の立案」($p<0.01$) の事後意識で、介入群が有意に高値を示した。

以上から、eラーニングを活用した対面（集合）学習を実践することで、従来の対面（集合）学習のみの授業よりも器械運動の技能・知識および指導意識を高めることができ、対面（集合）学習と同等以上の教育効果がある可能性が示され、本研究における対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた器械運動の授業実践は、教員養成段階における器械運動の指導力獲得に有効な授業として提案できるものと結論づけた。

2. 審査経過

（1）独創性と発展性

器械運動は学校体育における体育領域の1つに位置づけられるが、実際の学校教育現場では取り扱われる授業時間が少ないなど、消極的な取り扱いをされていることが報告されている（浦井、1994）。さらに、長谷川ら（2017）が中学校の保健体育科教員に行った調査では、学校学習指導要領上の必修領域であるにも関わらず実施していない学校も散見され、これは、器械運動に対する教員の指導力不足が一因と考えられると報告している。本研究では、学校教育現場における器械運動の指導に関する実態を明らかにすることに加え、教員養成段階において対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践を行い、養成段階における器械運動の指導力獲得に向けた新たな授業提案を行っていることから独創性が認められる。また、GIGAスクール構想と関連して、学校教育現場では、ICTを活用した授業が増加することから今後の発展性が考えられる。

（2）教育実践への貢献および社会的貢献

学校教育現場および教員養成段階における器械運動の指導に関する改善を目的とした研究である。器械運動の授業において対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践を行い、介入群（対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業実践）と非介入群（対面（集合）学習のみによる授業実践）の2群を比較することで、器械運動の指導力獲得に関する差異を検討している。その結果、すべての項目で介入群が非介入群よりも高値であり、特に跳び箱運動に関しては「指導に関する知識」と「指導内容の立案」について介入群が非介入群よりも有意に高値を示したことから、対面（集合）学習とeラーニングを組み合わせた授業は、教員養成段階において身につけるべき器械運動の指導力獲得に有効な授業方法として提案できるものと結論づけられた。本研究で得られた教員養成段階での指導力獲得にeラーニングを組み合わせた授業が有効であるとする新たな知見は、教育実践に及ぼす影響と貢献が大きいといえる。さらに、質の高い教員養成に資する結果と授業提案がなされたことから社会的意義を有すると考えられる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は 後藤大輔 の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。